

日本手話における時間表現

桐 生 和 幸

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第64号抜刷）

日本手話における時間表現

Temporal Expressions in Japanese Sign Language

桐 生 和 幸^{1) †}

要旨

本稿では、日本手話のテンス・アスペクトについてこれまでの先行研究について触れながら、ネイティブサイナーに係る日本手話入門書のデータ、NHK手話ニュース、ネイティブサイナーによる自然発話の録画データを基に日本語とも対照し、日本手話は基本的にテンス・アスペクトの義務的な表示はないが、テンス・アスペクトの一定の意味を担う形式があり、特に＜終わり＞や＜ある＞という語彙要素が文法的な形式としてどのような使われ方をしているか、ディスコースも含めて検討することが有効であることを示した。

キーワード：日本手話、テンス、アスペクト

はじめに

世界には7000以上もの言語が現存している¹⁾。言語というتماず一般的に想起されるのは、音声言語であるが、地球上に存在する自然言語には、視覚言語である手話言語 (sign languages) も含まれる。

本稿では、日本のろう者の間で日常的に用いられている日本手話 (JSL) における時間表現の形式についてこれまで調査したデータから分かったことをまとめ報告するものである。現状まだ十分に包括的な記述ができていないが、先行研究を踏まえつつ、これまで認識されていなかった手型によるテンス・アスペクトの表現形式について述べる。

日本における言語としての手話の研究は歴史が浅いことから、日本手話全体の体系についてはまだ十分な記述が言語学的な観点からなされていない状況にある。日本手話は時間的な文法カテゴリであるテンスを具現化しておらず、出来事の時間的展開を表すアスペクトとともに、まだ体系が十分に明らかにされていない。

い。

本稿の分析のスタンスは、言語の機能に焦点を置いたアプローチのもと、音声言語で言うテンスやアスペクトに係る時間表現がどのように表出されているのかを手話データを基に検討してみるものである。現時点では、まだ課題も多く残るが、先行研究では指摘されていないようなことも分かってきたので、そのことについて触れておくものである。

日本手話

ろう者が日常的に用いる手話を「日本手話」と呼ぶ。日本手話は、日本語を単に手指動作に置き換えたものではなく、両者は全く異なる言語である²⁾。しかし、一般的に「手話」と呼ばれるものは、この日本手話を含むものの、日本語を手話の表現を用いて表した「手話」も通訳の現場では用いられており、これを独立した言語としての日本手話とは区別し、「日本語対应手話」あるいは「手指日本語」と呼ぶ。

「日本手話」は日本語とは異なる文法体系を持つ言

^{1) †} 美作大学生活科学部社会福祉学科

語で、ろう者の間で日常的に使われ、デフファミリーと呼ばれる家族がろう者である家庭内では、子どもたちが母語として、あるいは、聾学校などのろう者コミュニティにおいて身につける言語である³。日本手話は、単に手指による概念表出だけではなく、視線、眉、頬、口、舌、首の傾き・振り、あごの方向などの非手指動作（Non-Manual Signals、NMS）と呼ばれる手段によって音声言語で言う副詞的な語彙や文法的な意味が表し分けられる。

「日本語対应手話」あるいは「手指日本語」と呼ばれる手話は、概念的には日本語そのもの、あるいは、日本語に似たものであり、伝達モードが音声ではなく日本語が手指に置き換えられた手話である。そのため、日本語と語順が同じであるので、日本語を声に出しながら同時に表出することが可能なものである。一方、日本手話を表出しながら、同時に音声日本語を話すことは、普通可能なことではない。英語や韓国語を書きながら、同時に日本語を話すようなものである。

言語学的な観点から言えば、日本語対应手話は、ある種日本手話との接触のもと成立しているピジンのなものであり、その中身は1語1語日本語が置き換えられた完全に日本語的なものから、日本手話的な要素も取り入れた「中間手話」と呼ばれることもある形態のものまで幅があると言ってよい⁴。少なくとも、日本手話のようなNMSがほとんど伴わず、手型のみの表出となることが多いし、世代を超えての継承やコミュニティ内での伝播共有する日本手話とは異なり、日本語対应手話は、あくまでも個人的なレベルに留まるピジンのなものである⁵。

さらに、よく言われることだが、ろう者にとって日本語は外国語のようなものであり、日本語の文法に依拠している日本語対应手話は、ろう者にとって読み取りが難しい場合がある（木村・市田 2014:25）。また、逆に日本語対应手話を学んだ聴者にとってろう者が使う日本手話はその読み取りは困難なものである。

日本手話の特徴

本稿では、日本手話（Japanese Sign Language、

略してJSL）のテンスおよびアスペクトに係る側面を検討するが、ここで言う「日本手話」とはどのようなものかを概観する。

視覚言語である手話言語（sign languages）も、音声言語と同様に言語としての特徴を備えているが、音声言語とは異なる特徴も存在する。手話言語も二重分節性を持ち、有限個の音素（手話言語では、手型、向き、位置、運動）の組み合わせにより語が形成され、語の配列規則に基づいて節や文が形成される。しかし、音声言語が線状的であり、同時に2つ以上の要素を表出することができないのに対して、手話言語は2つ以上の言語的要素を同時に表出して表すことができる。特にNMSは手型で表される語彙的な要素と同時に表出され、細かい副詞的な要素や機能語的な意味を表す。

日本手話は、日本語同様基本的にSOV言語であるが、WH疑問詞の現れる位置や名詞修飾を行う形容詞などが日本語とは語順が異なる場合がある。また、日本語と異なり、動詞が取る項の格関係を表す格標識は存在しない。この点は孤立語的な要素を示すと言える。

調査データについて

本稿では、テンス・アスペクトという文法的な機能がどのような表現形式で日本手話において具現化しているかについて記述し、その特性について整理しようとするものである。

ここで対象とする日本手話のデータは、基本的にネイティブサイナーによって用いられている手話データを基本とする。そこで、ネイティブサイナーによる自由発話データを考察の対象とするが、言語現象を幅広く見るためにネイティブサイナーのキャスターによる手話ニュースのデータも考察の対象とする⁶。また、補助的に手話の入門書のうち、ネイティブサイナーがかかわっている日本手話データも取り上げることとする。

日本手話のテンス

テンス（時制）とは、時間軸上における出来事時（event time）の位置を表す文法カテゴリである。基

本的なテンスでは、出来事時と発話時が同じ場合、現在 (present)、出来事時が発話時よりも時間的に前であれば過去 (past)、後であれば未来 (future) と理解される。このような時間的区別が文法化される場合、この3つの時間が文法的にすべて区別されることもあれば、過去と非過去、あるいは、未来と非未来のような2項対立の体系を持つ場合もある。日本語のテンスは動詞の形態上に現れ、過去 (した)・非過去 (する) の対立を基本とし、テンス形式の区別は義務的である⁷。

出来事が時間的にどの位置にあるのかを示すテンスを文法的手段として持たない音声言語も多くある。例えば、中国語やインドネシア語といった言語では、出来事の時間情報は「昨日」「さっき」などを意味する語彙的な情報によって伝達は可能であるが、動詞の形態変化やその他の文法的な手段によってテンスが区別されることはない。

先行研究 (神田・藤野 1996、岡・赤堀 2011、松岡 2015) では、日本手話には文法的なテンスはなく、そのため日本語のように時制に応じて動詞が語形変化することはないとしている。例えば(1)と(2)では<以前>や<去年>という時間副詞があることで、<住む>という動詞の出来事時が発話時よりも前、つまり、過去の出来事であることが理解される⁸。

(1) PT1 以前 東京 住む。

「私は以前東京に住んでいました。」(田中 2014:43)

(2) 去年 合格 そう？

「去年合格したんだって？」(米内山 2011:66)

日本手話では、絶対的、相対的な時間を表す副詞的表現以外に、語彙的な手段によってテンス的な意味を担わせることができる。

奥・赤堀 (2011:80) は、未来の出来事を表す助動詞として<来る>という手指動作を含む以下のような例を挙げている⁹。

(3) 台風/ 晴れる 来る

「台風の後には晴れるでしょう。」

(4) お菓子 食べる/ 太る 来る

「そんなにお菓子を食べたら太るよ。」

また、過去の出来事については、木村・市田 (2018:86) は、以下の2つの例を挙げ「過去と完了」を表す助動詞の存在を指摘している。

(5) 病気 死ぬ-終わる

「病気で亡くなりました。」

(6) 病気 ため 死ぬ-PAST

「病気のため亡くなりました。」

木村・市田は、<終わる>が「完了アスペクトの助動詞」であり、PASTが「過去時制の助動詞」であると説明している。<終わる>は、もともと語彙的な意味を持つ語であり、両手の手のひらを上に向け下に下げながら5指をすぼめる手指動作で表される。PASTは、両手を開いた状態で下に向け、手首から先を下に降ろす手指動作で表される。

木村・市田が呼ぶこの助動詞は、どちらも日本語では過去時制を担う表現に対応するが、「過去時制は、「確かにそのようなことが過去において起こった」という意味で用いられます。」と述べている。<終わる>についてはそれ以上の説明はないが、「完了アスペクトの助動詞」とはいえ、過去をマークする機能も担っていることは明らかである¹⁰。

音声言語においても、<終わる>という意味を表す動詞が文法化し、完了アスペクトマーカーとなり、さらに過去マーカーへと発展する例は多くある (Bybee et al. 1994)。日本手話における<終わる>は、音声言語の場合と同じように過去マーカーとして文法化していると言えるであろう。

過去の助動詞として機能する2つの手指動作<終わる>とPASTには差はないのであろうか。この点については、明快な説明がなされた先行研究は存在しない。また、どの動作に対しても両者を自由に入れ替え

で使うことができるわけでもないようである。語彙によっては、それ専用の過去形と言っても良いような形式に融合している表現もある。例えば、「食べた」という過去の動作は、＜食べる＋終わる＞という形式で表され、＜食べる＋PAST＞とは表出しづらいという。さらに、＜終わる＞は＜食べる＞の動きのある手から連続して片手のみで表出されることも多く、単一の語彙と言ってよいぐらい融合している。また、指文字の＜め＞で表される＜見る＞という動詞についても、＜見た＞という形はPASTで表され、＜終わる＞では表されにくい。さらに、＜食べる＞同様、手指動作に連続して片手のみで表出されることが多い。

日本手話では語彙的な要素を用いなくてもテンズ的な意味を添えることができる。これは、NMSの一種である口型を用いる。過去については日本語「た」のような口型をつけて表すことができ、非過去については「る」という口型をつけて表すことができる（佐々木・久保田 2002:17）。

今回得たネイティブサイナーの発話データにおいても、過去の出来事を語彙的な手段ではなく、口型によって表している例がいくつか見られた。次の例では、＜落選する＞＜行く＞という手指動作と同時に口型＜ta＞が現れている。

(7) 2009 台北, PT1 最後 落選<ta>、最後 落選
目的 応援 行く<ta>

「2009年は台北だったんですが、最終選考で落ちました。落ちたので応援に行きました。」

テンズ形式の分析

ここで、「NHK手話ニュース845」において、日本語で過去の状況を表している場合、どのような形式が認められるかについて触れる。NHK手話ニュースは、ネイティブサイナーによるニュースとなっており、日本手話として考えられるものである¹¹。データは、現在まだ整理中であるが、ここでは2014年から2015年の間に録画した13日分のデータを基にしたものを報告する。

今回得られたデータからは、以下のようなパターンが認められた。

- (8) a. ＜終わる＞
b. PAST
c. 口型 <ta> または <pa>

＜終わる＞とPASTが同時に現れることはないが、どちらも口型を同時に伴うこともある。

＜終わる＞と共に起していた動詞は、＜書く＞＜確認する＞＜決める＞＜けがする＞＜死ぬ＞＜主張する＞＜処分する＞＜調べる＞＜する＞＜逮捕する＞＜助ける＞＜伝える＞＜閉じる＞＜流れる＞＜発表する＞＜説明する＞＜非難する＞＜開く＞＜見直す（見る＋変える）＞＜燃える＞＜優勝する＞＜分かる＞などであった。

また、PASTと共に起していた動詞は、＜選ぶ＞＜お願いする＞＜けがする＞＜作業する＞＜出席する＞＜知る＞＜相談する＞＜作る＞＜撤去する＞＜始める＞＜発表する＞＜開く＞＜優勝する＞＜分かる＞などであった。

また、口型<ta>/<pa>のみで現れたものは、＜決める＞＜なる＞＜発生する＞＜見つかる＞＜分かる＞であった。

現時点ではデータの数が少ないので、妥当な一般化は難しいが、ほとんどの動詞で3つのパターンのいずれかが選ばれている。3パターン全てで現れたのは＜分かる＞という動詞であった。同じキャスターで両方が現れた場合はなく、異なるキャスターで＜終わる＞とPASTが分布している。また、口型は<pa>が現れたが、「アレルギー反応が抑制されることを明らかにしたということです。」という日本語の「明らかにする」に対応する＜確認＋見つける＋分かる＞の最後の＜分かる＞の部分に現れた。この文は、＜分かる＞が主節動詞ではないので、その点も何か関係するかもしれない。

また、＜終わる＞PASTの両方が現れたほかの動詞としては＜選ぶ＞＜決める＞＜けがする＞＜発表する＞

><優勝する>があった。このうち、<発表する>はキャスターによる違いが見られた。また、<決める>については、同じキャスターではほぼ連続する文において両方を使っている例が見られた。最初の例は、PASTが使われており、「安倍首相の無投票での再選を正式に決定しました。」という内容の文で、ニュースの冒頭である。その後、詳しい経緯の説明ののち「両議員総会を開き正式に決定しました。」という内容で、ここでは<終わる>を用いている。PASTが使われているほうは、木村・市田で指摘されているような単なる過去の出来事があった、というニュアンスであり、後者の方は、より決定の完結性に焦点が当たり、<終わる>の語彙的意味がある程度残存しているという可能性がある。

以上、手話ニュースのデータを見たが、現時点ではデータ数が少ないため、一般化はしづらいが、過去マーカーとしての<終わる>とPASTは、どちらでも使える動詞がある一方で、前に来る手指動作の動きから連続して使いやすいものとそうでないものがある可能性が示唆される。

また、ネイティブサイナーからの聞き取りでは、PASTは高齢者が使う印象であるという反応であり、自身ではPASTは特定の語彙以外はあまり使わないということであった。

今後は、さらに手話ニュースのデータ解析を進め、動詞のアスペクトタイプとの関連、文脈上の差なども考慮した分析を行って行きたいと考えている。

<終わる>のディスコース上の働き

<終わる>が過去のマーカーとして機能することは先に触れた。しかし、日本語の「た」のように、必ず付かなければいけないものでもない。ここでは、ネイティブサイナーの自然発話データから見える<終わる>の持つディスコース上の機能について考察してみたいと思う。

日本語の過去形式である「た」は、主節単位で付くことが求められる。しかし、言語によってはテンスの標示は、ディスコース的に1度だけでよい言語もある

ようである。Dixon (2012:12)によると、北米インディアンのNootka語やポリネシアのフィジー語では、話の最初の節にテンス表示があり、そのあとはそのテンスに反することが示されない限り、ディスコース上その同じテンスの話であることが了解される。このようなディスコースも考慮したテンスの仕組みが日本手話にもあるように思われる。

ネイティブサイナーに「今朝起きてから、ここへ来るまでの出来事」を語ってもらった。話の構成は、4つのまとまったエピソードからなり、1)「朝起きてからご飯を食べようとしたらこどもにパンを取られて、それでハッシュドポテトを食べた。」、2)「牛乳がなかったので妻に買ってきてもらって飲んだ。」、3)「そのあと妻が出かけて、子どものお守りをし部屋の片づけや掃除をした。」、4)「バスに乗って出かけようとしたら子供にぐずられて、おばあちゃんに見てもらってここまで来た。」という一連の内容である。

この話の中では、3回<終わる>が現れた。現れた場所は、エピソード1から3のそれぞれの最後の述語である。つまり、<食べる+終わる>、<飲む+終わる>、<掃除する+終わる>であった。それぞれのエピソードは、複数の場面から構成されているが、それぞれの場面に現れる動詞には<終わる>が現れてはならず、エピソード4以外の最後の動詞にのみ現れているというわけである。エピソード4の最後の動詞は<来る>だが、この動詞にはテンス的要素は何も現れていなかった。

この発話データからうかがえることは、<終わる>が単なる過去マーカーではなく、ある一定の話の区切りを示す機能と同時に、その後に別のエピソードが続くということを示す継起マーカーの役割を果たしている可能性を示唆している。

日本手話におけるアスペクト形式

次に、アスペクト形式について考察する。アスペクトは、出来事の把握の仕方、あるいは、出来事の展開局面に関する区別の仕方を表す文法カテゴリである。アスペクトは、ふつう語彙的アスペクトと文法的

アスペクトが区別される。語彙的アスペクトは、動詞あるいは動詞句が表す時間的特性に関する区別である。語彙的アスペクトは、限界性 (telicity)、瞬時性 (punctuality)、変化 (change) といった特性によって記述が可能で、この組み合わせにより「状態動詞 (state verbs)」、「活動動詞 (activity verbs)」、「到達動詞 (achievement verbs)」、「達成動詞 (accomplishment verbs)」、「単一相動詞 (semelfactive verbs)」の5つが区別される¹²。

日本手話の語彙的アスペクトについては、佐伯 (2016) で論じられているが、本稿では扱わない。本稿では、もう一つの文法的アスペクトについて触れる。

文法的アスペクトは、事態全体がどのようにとらえられているか (視点)、事態展開のどの局面にあるかを表す文法範疇である。ロシア語のように事態全体を丸ごととらえるのか (完成相: perfective)、その内部的な視点を取るのか (非完成相: imperfective) の対立を持つ視点的アスペクト (viewpoint aspect) が有名であるが、英語や日本語のように事態の進行や継続性に関する対立が関係するアスペクトの体系も存在する (De Swart 1999)。日本語は、「する」と「している」という継続か非継続かという1次的なアスペクト対立が見られ、テイル形式は進行相 (progressive aspect)、結果相 (resultative aspect)、パーフェクト (perfect) および反復相 (iterative aspect) などに関係する。

日本手話のアスペクトについては、管見では先行研究において包括的かつ体系的な記述はなされていない。語彙的な手段によって局面 (開始、途中、終了) を示す2次的アスペクトについては複数の先行研究において言及がある (岡・赤堀 2011、松岡 2015)。これらは動詞の後に<始める><終わる>という動詞をつけることで表現され、複合動詞的な形式であると言える。

本稿での関心は、1次的なアスペクト対立にあり、日本語のslvsシテイルのような対立が認められるかについて考えてみたい。

日本手話では、進行の意味を表すのによく<中>と

いう漢字を指で表した手指動作が用いられる。

(9) 白状 ダイエット 中 PT1

「実は、ダイエットしているんです。」

(米内山 2008:70)

日本語の場合、動作の進行については、必ずシテイル形式をとらなければ、動作の進行に解釈されることはないが、日本手話では動作の進行を表すのに<中>は義務的ではない。

(10) 今 仕事 探す

「今、仕事を探しています。」(田中 2014:171)

また、日本語のシテイル形式と異なり、結果状態を表すことはできないようである。

(11) PT2 姉 結婚 終わる?

「あなたのお姉さんは結婚していますか。」

(木村・市田 2018:83)

この文においては、<中>を使うことができない。しかし、次の文を見ると結果状態を表しているようにも見える。

(12) 居る 今 出る 中

「いますが、ちょっと席を外しています。」

(米内山 2008:142)

(11)と(12)の違いは、<中>が表されている事態が終結していないことを表すアスペクト形式であると考えれば説明が付く。つまり、日本語であれば「している最中」という意味に該当するものである。自然な流れとして「結婚する」という事態は、その終結としての離婚が当たり前に想定されるものではない。それに対して「席を外す」という事態は、「席に戻る」ということが自然に想定されるものであり、その終結点に達する前の内的な状態にあることを自ずと含意する¹³。つ

まり、＜中＞の一つの機能は、述語によって表されている状態が最終的には終結することが想定される一時的なものであることを示すものである。次の例では、日本語では「している最中」とは訳すことができないが、まさに一時的な状態を表している例である¹⁴。

(13) 白状 体 反対 中

「実は、あまり調子が良くなって。」

(米内山 2008:29)

また、結果状態そのものは、裸の述語でも表すことができるようである。次の例では、骨折した後の状態を＜骨折する＞という動詞だけで表している例である。

(14) 腕 骨折する

「腕を骨折しちゃった。」(米内山 2008:166)

その他＜中＞は習慣や反復動作も表すことができる。この点も考慮すると、＜中＞という形式は、完成相(perfective)に対する非完成相(imperfective)を表す形式であると捉えることができる。日本語のテイルは、結果状態を表すことから後で見るパーフェクト的な性質の強い形式で、非完成相とは異なる¹⁵。

＜ある＞という動詞の文法化

アスペクトには、パーフェクトと呼ばれるものがある。パーフェクトは、参照点を持つ点で、テンス的な要素も含むアスペクト範疇である。パーフェクトは、基本的にある基準点よりも前に起こったことが、基準点の状態と何らかの関係があることを表す。例えば、現在パーフェクトであれば、過去の出来事が現在時と何らかの関連性があることを表す。

パーフェクトが典型的に表す意味は、動作の直前での終結、動作の結果状態、経験、状態の継続等である。日本語では、テイル形式がこのパーフェクト的な意味に関係している。このパーフェクトの意味は、語彙的アスペクトとは関係なく解釈が可能である。例えば、

「見ている」や「死んでいる」は文脈がなければ語彙的アスペクトの特質からそれぞれ動作の進行、結果状態と解釈されるが、「その映画は一度見ている。」「あいつは一度死んでいる。」という文においては、どちらも経験というパーフェクトの意味を表す。

日本手話において経験は、(15)のように動詞のあとに＜経験+ある＞と表出することで表される。

(15) PT1 昔 横浜 行く 経験 ある

「私は昔横浜に行ったことがあります。」

(田中 2014:45-46)

日本語でも「行った経験がある」ということもでき、日本手話の例は表面的には日本語の表現に共通する。

手話ニュースにおいて、日本語でパーフェクトの意味を表すテイル形式の表現に対して、日本手話では(16)や(17)のようなくある＞を助動詞的に用いた表現が確認できる。

(16) 調査 報告 発表する ある

「調査報告を発表しています。」

(17) 女性 活用 する 必要 いう ある PT3

「女性の社会での活躍を掲げています。」

これらの例では、発表した内容や掲げた目標が現在も効力を持つ現在時点との関連性を表している例である。日本手話では、動詞のあとに＜ある＞という表現をつけることで過去の出来事の現在時との関連性を表していると考えられる¹⁶。

まとめ

本稿は、日本手話におけるテンス・アスペクトの形式としてどのようなものが認められるかについて、先行研究や手話ニュース、日本手話入門書、および、ネイティブサイナーの発話データをもとに考察を行った。

日本手話は、日本語のように動詞にテンスが語形変化として現れることはないものの、＜終わる＞や両

手の掌を下すPASTといった手指動作による表現形式や非手指動作（NMS）である口型<ta>/<pa>によって過去であることが明示できる。ニュースデータからは、それぞれの形式が特定の動詞と結びやすい可能性について指摘した。この点については、今後データ量を増やし定量的に分析を進め傾向を探ることが有効であると考えられる。また、<終わる>については、ネイティブサイナーの発話データから、単なる完了・過去の形式ではなく、ディスコース上連続するエピソードの終結および次のエピソードへの継起を示唆するマーカーとして機能している可能性について言及した。

日本手話におけるアスペクトは、日本語のスルvsシテイルのような1次的なレベルにおけるアスペクト的対立は認められない。進行相を表すのに<中>という形式の使用が可能だが、文脈的な支えがあれば、裸の動詞で進行相の意味に解釈が可能である。また、結果状態については、<終わる>という完了形式を使う場合があるが、裸の動詞のままでも可能である。そのほか、<ある>という存在動詞が過去の事態が現在時と何らかの関連性を持つことを示すパーフェクトの意味を担う助動詞として文法化しているを見た。

本稿では、以上のようにこれまで筆者が集めてきたデータを中心に、日本手話におけるテンス・アスペクトの体系を機能的な観点から記述を試みた。この試みは、現在進行形であり、一旦の区切りとして本稿をまとめたものである。本稿での分析については今後さらにデータを積み重ねて検証していく必要があるが、日本手話のテンス・アスペクトについて音声言語の研究成果と照らし合わせながら一定の整理をしたものである。

参考文献

- Bybee, J., Perkins, R. & Pagliuca, W. (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago University Press.
- Dixon, R. M. (2012). *Basic Linguistic Theory*. Vol. 3:

Further Grammatical Topics. Oxford University Press.

- De Swart, H. (1998). Aspect shift and coercion. *Natural Language & Linguistic Theory* 16(2), 347-385.
- 岡典栄 (2012)「日本手話：書きことばを持たない少数言語の近代」博士論文、一橋大学.
- 岡典栄・赤堀仁美 (2011)『文法が基礎からわかる日本手話のしくみ』大修館書店.
- 木村晴美・市田泰弘 (2018)『はじめての手話—初歩からやさしく学べる手話の本』(改定新版)生活書院.
- 工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房.
- 佐伯敦也 (2016)「日本手話におけるアスペクト：語の内在アスペクトと運動形式の関連を中心に」『言語情報科学』14, 1-17.
- 佐々木仁子・久保田正人 (2002)「日本手話と日本語」『言語文化論叢』千葉大学外国語センター 第10号, 13-24.
- 鈴木泰 (1991)「完了の助動詞のアスペクト的意味—源氏物語の移動・移し替え動詞の場合」『国語学』165, 67-80.
- 高橋亘・仲内直子・宮地絵美・村上裕加 (2007)「日本手話と日本語の構造比較と聾者にわかりやすい日本語の表現」『関西福祉科学大学紀要』10, 75-82.
- 田中清 (2014)『DVDだからよくわかる基本の手話』西東社.
- 松岡和美 (2015)『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』くろしお出版.
- 米内山明宏 (2008)『きちんと伝わるはじめての手話』ナツメ社.
- 米内山明宏 (2011)『U-CANのイラスト&DVDで学ぶ 初めての手話会話』自由国民社.
- 米川明彦 (2002)『手話ということば—もう一つの日本の言語』PHP出版.
- 1 Ethnologueという世界の言語の一覧を掲載しているウェブサイトの2018年2月21日に発表された第

- 21版のリストによると、7,097言語が掲載されている。
- 2 言語学的には、日本手話と日本語対応手話を区別することに何ら問題はない（松岡2015:11）が、両者を区別することに異議を唱えている団体や個人も少なからずいる。その理由は、管見では言語学的なものではなく社会的な要因によるもののようである。
- 3 手話使用者のうち、デフファミリー出身のろう者自体は数が圧倒的に少ない。手話も言語であるから、当然地域による差異がある。昔は離れた地域の手話は通じなかったようであるが、現在は、手話の共通化が進んできており、相互理解の度合いも高まっているようである（米川 2002）。また、家庭でしか通じない手話表現はホームサインと呼ばれる。
- 4 松岡（2015:10）では「中間手話」を「混成手話」という呼び方を採用している。
- 5 中途失聴などともともと日本語を習得している聴覚障害者にとっては、日本語対応手話の方が理解しやすい。
- 6 ネイティヴサイナーのデータは、京都府在住の多世代にわたるデフファミリー出身の30代の男性ろう者の発話データを録画したものである。データの録画は、同じく京都府在住の30代男性コーダの協力を得て行った。両名にはご協力いただいたことについてここで謝辞を述べておきたい。また、NHKの手話ニュースについては、デフファミリー出身であるネイティヴサイナーの女性キャスター5名、男性キャスター2名のデータを2014年から2015年にかけて録画したデータを基にしている。
- 7 日本語のテンスは時制の一致を持つ英語のように絶対的なものではなく、従属節においては相対的な時間の前後関係をマークするような使い方や、小説の場面描写などで過去の文脈において非過去形が用いられることもある。
- 8 本文中で日本語の語彙を表す場合は「」を用い、日本手話の語彙を表す場合は<>を用いることとする。また、例文中のPTは、指差しを表し、そのあとの数字は人称を表す。<ta>のような表記は、直前の手話語彙と同時に現れる口形を表す。
- 9 「/」は、間を表す。
- 10 <終わる>もPASTも東西での方言差はないようであるが、高橋他（2007:78）では、日本手話の大阪方言において、<終わる>とPASTに当たるもの以外に両手を打ち合わせるものが「過去詞」として用いられると述べている。また、過去の助動詞として<終わる>は、「大阪では少し形式的になり体験を報告するような意味になる」と述べている。
- 11 もちろん、ニュースという特性上、日常会話や地域特性の現れる伝統的手話とは異なる表現が見られる。例えば、天気予報で「明日晴れるでしょう。」という内容は、伝統的な手話では<明日 晴れる 来る>という表現が使われるが、ニュースでは<明日 晴れる 見込み>という表現形式になる。この表現に違和感を持つろう者もいるようである。しかし、このような違いは、ニュースという特性上見られる文体的な差と考えることができ、日本語でも口語では「明日は晴れるみたい。」「明日は晴れそうだ。」のように言うが、ニュースではこのような表現が聞かれることはない。
- 岡（2012:101）も書き言葉を持たない日本手話ではあるが、ネイティヴサイナーによる放送が主体となっているNHK手話ニュースの文体について日本語の書き言葉である新聞の文体と比肩し、「そこにはすでに近代の「書きことば」にふさわしい日本手話の文体ができてきているのだ」と分析している。
- 12 厳密にいうと語彙的アスペクトは、動詞そのものというよりも動詞が取る項も含めた動詞句述語のアスペクトタイプの分類である。また、近年では語彙的アスペクトは、他の文法的な手段によって別のタイプへの変換（coercion）が起ころと考えられている（De Swart 1998など）。
- 13 日本語の「結婚している」という結果状態を表すのに、日本手話では(11)のように<終わる>という完了のアスペクト形式を用いる。これは、中国語に似ている。(11)を中国語にすると「你姐姐结婚了」

吗？」となり、もともと「終わる」という語義を持ち、文法化して完了アスペクト形式になった「了」に似ている。

- 14 日本語で「最中」を使うことができないのは、日本語の最中は動的な述語を要求するからである。ここでは「良くない最中」と言えないのは、「良くない」という述語が状態性の述語だからである。状態は、限界点を持たないため、そもそも終結点が想定できない。

- 15 工藤（1995）では、シテイルは基本的なアスペクトとして「継続相」、それに加えてパーフェクトの意味を持つとしている。

- 16 「ある」のような存在動詞がパーフェクトの意味を表す助動詞として文法化する例は、日本語の古典語におけるタリにもみられる。タリはもともと「連用形+テ」のテにアリが付き、音韻的に融合し、完了・存続（パーフェクト）を表す専用の形式として発達した。鈴木（1991:69）では、移動動詞につくタリ・リの意味について「タリ・リの場合は、全ての例が出現的意味を表すので、動作の全ての局面をひっくるめて動作がまるごと完成したことを表すと同時に、その結果として発話時における動作主体の存在を積極的に表すというアスペクトの意味をもつと考えられる。」と述べている。これは、過去の出来事が現在時に関連性を持つことを示すパーフェクトの典型的な意味である。